

水銀の文献で追及

病判
侯裁
水裁

“反論はインチキ” 原告側

西田氏“聞いたことがない”

元初日監が長子、堀田栄一氏(元)の「チツソ」監査役」に対する最後の尋問を迎えた水俣病裁判の第二十六回口頭弁論は、九日午前十時から熊本地裁第三部(斎藤次郎裁判長係り)で開かれた。この日原告弁護団は、チツソが三十四年当時熊本大の有機水銀説に対する反論の最大の根拠にしていた「アセトアルデヒド合成のさいに、有毒な有機水銀化合物が生成する事実の文献もない」(三十四年七月の「所謂有機水銀説に対する上場の見解」)とする点をつき「アルデヒド合成の過程で有機水銀化合物が出来ることは、早くからわかっていて、チツソの反論はインチキだ」と追及した。

原告側は、一九二一年(大正十年)アメリカの化学者ジュリアス・A・ニューランドが「ジャーナル・オブ・アメリカンケミカル・ソサエティ」に発表した論文を提出、この中でニューランドが「アセチレン吹き込み後の触媒液には、どんな形の無機水銀化合物も存在しない」と論じている点を指摘して、西田氏をたたした。これに対して西田証人は、「ニューランド論文は、理論的には触媒液の中に有機水銀化合物が存在していることを示すことにはなる。この雑誌は会社でもとっており、研究者は見ていたと思うが、自分は聞いたことはない」と答えた。

さらに原告は、三十七年七月、チツソ技術部の五十嵐利夫氏が発表した「水銀触媒によるアセトアルデヒド合成反応速度の解析」(『触媒』一九六二年四号)を示

し「西田証言によると、チツソでは昭和二十九―三十年にアルデヒド合成過程の研究をしたといっているが、それをまとめたと思われるこの論文にも、触媒液の中に可溶性の有機水銀が出来ることが証明されている。これはチツソのいう「有機水銀の出来る事実も文献もない」と矛盾する」と詰め寄った。西田証人は「上場としては照

大のいうメチル、エチルなど有機水銀のなかの低級アルキル水銀を問題にして反論したもので、「有毒な有機水銀」はアルキル水銀をさすものと、われわれは理解している」と答弁した。

この目で西田証人に対する尋問は終わり、十日は次の証人の元水俣工場技術部長、徳江毅氏(現チツソ専務)の証人調べに移る。